会員の広場

IUGG 総会雑感*

廣田　勇**

去る7月前半の2週間，米国コロラド州ボールダーで開かれたIUGG（国際測地学地球物理学連合）の第21回総会に出席した．この会合の正式な「会議報告」は近々本誌に印刷されると聞いているので，ここでは一参加者としての立場から主観的な感想を記すにとどめる．

1．お祭りの功罪

IUGG 総会は「お祭り」である，と言う人がいる．確かに，参加者総数が5,000人を越えるような会合は，純粋な研究会というより「顔合わせ」の色合いが強い．IUGG に限らず，その一分科会たるIAMAP（今回からIAMASに名称変更）の研究集会も，参加者が千数百人ともなれば同類であろう．だから，このような大きな学会には出席しない，出るならばもっと小人数で実質的な議論のできる特定テーマのコンファランスのほうを選ぶ，という人もいる．それはそれでひとつの見識と言ってよい．

過去20年間，IUGG およびIAMAP総会に，役員としての仕事を含めて，すべて「精勤」してきた私の目から見ても，近年の規模の増大はこのような国際学会の「体質変化」を様々な形で示している．

この事情は，近年のオリンピック大会に似てはいまいか．参加することに意義のあった時代はとうに去り，今やプロ化・商業化によって肥大化したオリンピックへの批判とともに，スポーツ本来の競技や勝敗への興味は，むしろ特定種目ごとの世界選手権やワールドカップ大会へと移行しつつあるように見受けられる．

しかしながら，最も重要なことは，その集会の規模の大小にあるのではなく，スポーツで言えば，それぞれの競技大会のプレーの中から如何にスリリングな名勝負や高レベルの世界記録が生まれたか，にこそある．それは観る側の人々に感動を与えることのみならず，同じ競技を目ざす次世代の若いプレーヤー達の大きな努力目標となることを意味している．科学分野の研究集会の意義もこれと全く同様と言えよう．スポーツの勝敗や記録に相当するものが，我々の場合，研究の内容や質を含めた論文であることは言うまでもない．

祭りの功罪という意味から象徴的な出来事が今回もうひとつあった．IUGG-IAMASの運営に関して，今回わが国は公式の代表者（National delegate）の登録を怠った．これは本来，IAMAS の対応窓口である学術会議（気象学研究連絡委員会）の仕事である．IAMAS Plenary Session を傍聴していて，日本の代表者の居ないことに，いささかの奇異の念をおぼえた．もっとも，同席していた松野教授の言葉を借りれば「IAMASはもともと同好会のようなもの」であり，たとえば WMO などがからんでいる国際プロジェクト運営等のビジネスとは異なって，IUGG-IAMASの運営会議には，「各国の利害得失を伴う駆け引き」などというような生ぐさい（非学問的な）意味合いは全くない．至極のんびりとしている．しかし，それだからこそ，焦点を研究発表論文の内容そのものにしぼることが出来るのだとも言えよう．

2．エポックを作るもの

それでは一体，今回の研究発表に見られる特色は何であったろうか．私が主として出席した中層大気関係についてみれば，第1週がシンポジウム形式，第2週がワークショップ形式で，口頭発表論文数の合計が200編余り，それにほぼ同数のポスター論文を加えれば総計は実に膨大な数となる．日本気象学会の大会1回の発表論文数が全分野合わせて300程度であることとくらべてみるとよい．気象の他分野のある日本人が中層大気セッションの大きさに驚いていたのも無理からぬことである．その内容も力学をはじめとし，化学，放射，輸送過程，等々の中心課題に加えて，個別的テーマと

* Impressions of the IUGG General Assembly held at Boulder, July 1995.

** Isamu Hirota, 京都大学大学院理学研究科地球惑星科学.

© 1995 日本気象学会

して，赤道域，太陽活動，ピナツボ火山，気候影響，GCM 比較，重力波等々，実に多様化している．

しかしながら，この一見賑やかな盛況を，1980年代前半のMAP（中層大気国際協同観測計画）の努力の結実であると手ばなしによろこぶだけで良いものかどうか．たとえば第2週の重力波ワークショップで，狭い教室に入りきらぬほど百人近くが集まったが，内容的に見て本当に新しいものは必ずしも多いとは言えなかった．ましてやこれが，一時的流行や附和雷同であっては困る．（似たような事情は，最近の TOGA-COARE．今年の気象集誌6月特別号は，玉石混淆以前の，粗製濫造と言われてもしかたがなかろう．）底辺の拡大が全体のレベルアップにつながる，と言えば聞こえは良いが，その反面，研究の世界においては大衆化に伴う安易な自己満足や甘い評価基準は厳しく律されねばならない．いかに同好会とは言え，市民マラソンとはわけが違うのだ．

今回の中層大気関係で，発展性を秘めた新しさ，という点で目を引いたものは，やはり UARS 衛星の観測結果である．測定データの検定•一次処理が終わり，ようやく本当の意味での解析結果がそろいはじめ，素朴現象論として興味ある図表がいくつか発表されている．問題は従って，これらのデータ解析の中から，観測事実としてまたそのメカニズムの解釈として，10年後20年後までテキストに残るような成果が定着するか否かにかかっている．

振り返ってみれば，過去から現在に至る研究の発展は，必ずしも一定のペースで進んできたわけではない．むしろ，新しい展開は，突発的間歇的な少数の優れた研究成果によってもたらされてきた，と言ったほうが良い．それがまさにエポックというものである．事実，私自身がこれまでに出席した IUGG や IAMAP の研究集会の場で発表された論文の中には，今もってスタンダードとして引き合いに出される優れた仕事がいくつか残っている．（論文の引用に必ず年号を併記する意味はそこにこそある．）

今回，2週間にわたり数多くの発表を聴いて自分自身のアンテナに感応した部分のメモを見返しながら，この集会の成果が今後10年経ったときどれだけ多くの人々に記憶され研究面に反映されているであろうかと，期待と不安のなかば入り混じった印象を感じた次第である．

編集後記：今年の夏は，中部日本にも豪雨の被害が出ました．この文を書いている8月中旬では台風の発生数は極端に少ないのですが，今月号がお手元に届く10月初めではどうでしょうか．台風の大きな被害は発生しなかったでしょうか．稲の実り具合はどうでしょうか．気象を生業にしていると，今日の天気から季節の推移までいろいろと気になることが多くなります．

日本は南北に長く，そのうえ山あり川あり海ありと変化に富んでいます．関東に住み着いている私などには想像だにできない現象が，それぞれの地域にあるはずです．また，普遍的な現象のように思えても良く見ると地域毎に違っているかもしれません．逆に，地域特有のものと思っていても，余所に似たような現象があるかもしれません．ですから，地域的な現象（メソスケールと言っても良いでしょう）に興味を持つ会員が全国的に交流するのは意味があります．

ここにも「天気」の出番があります．年2回の大会が交流の良い機会ですが，種々の理由で出席するのが困難な会員も数多いでしょう．「天気」は，原則的には気象学会の全会員の手元に届く月刊誌です．数か月の時間差はありますが，装置が無くても絵や写真入りで説明できるなど，紙のメディアももうしばらくは捨てたものではありません．論文でなくても，カラーページ，気象談話室，情報の広場，支部だよりがあります．内容に応じて分類はいろいろでしょうが，会員からの発信がなければ始まりません．印刷費を執筆者に請求することはありませんので（論文等カラー写真は例外），情報交換誌としても利用していただければ幸いです．

（里村雄彦）